「しぐさ」という動作の表現

2001.05.24[表現法・実用表現法]

—多田道太郎著『しぐさの日本文化』に誘われて—

1、「咳払い」の表現

戸井田道三『能芸論』に、

咳払いするときの実感を反省してみると、ことばがなめらかに出てこないのは、何かが邪魔をしているからと無意識のうちに感じ、それを吹き払おうとする気分がある。ちょうど痰が、のどにからまって発声をさまたげているのを吹き払うのと同じである。あるいは類感呪術といわれるべきものかも知れない。とにかく、意志的に咳払いをするところに、ひとりでに出てくる生理的な咳とはちがった社会性をみとめないわけにはいかないのである。

類感呪術（模倣呪術）／Homoeopathic (Imitative) magic

呪術形態の一つ。共感の法則を前提とする。類似の法則とは「似たものは似たものを生む」となる。この応用として「何かがある行動をすれば、似たものも同様のことをする」「何かに起こることは似たものにも起こる」「似たもの同士は性質を共有する」という三つの法則がある。

もともと悪魔外道の跳梁を払いのけるためのもので、決然と何かを述べようとする時には、おのずから「エヘン」と一つ咳払いをする。ここから、まつろわぬ輩を威圧したり、敵意をもつ連中を見下したりするとき、「エヘン」と一つ咳払いをして威風を示して見せるという行動が起こる。

社会性を産む「同調の咳払い」←まがまがしい世界への非同調性＝魔除け…外道退散を願う意志表示・権威依存

「そうですネ」という応対表現←世間の通念によりかかった（「よらば大樹の陰」）姿勢表現

その回転展望閣自体が？回ってるんじゃなくて～、床だけが回ってるんで？、こう、足を～、あのこうやって、両方に置いてると～、あの最後には股裂けになっちゃうっていうそういう（笑）、世界なんですけれども～。ん～とネェ、そうですネ今ネェ……どのくらい回ったのかな～、ここに上ってきてもう一周くらい～したかもしれませんネェ。《[ネット検索]松浦有希の、夕暮れ探険隊》《[ネット検索]=真夜中人魚= 再録》

2、手を左右に振る→拒否表現

「……じゃないが」

南方熊楠の文章

予幼時、和歌山の小学生など、人が斬れたとか、負傷したとか、の噺をするに、必ず『吾が身じゃないが』と前置して、さて爰をこう斬れた、これからそれ迄火傷したなどと自身の其所を指して話した。先ず自身を祓除して、後に凶事を教示するのだ。

板坂　元『日本人の論理構造』

芥川の言葉じゃないが、人生は一行のボードレールにもしかない

私たち日本人のばあい、困ったこと、嫌なことがおこったり、あるいは思い切って何かの意思表示をしなければならぬハメに陥ったりすると、手で「払い」のける身振りをしたり、あるいは「エヘン」と強く咳払いしたりするのである。こうして身近な神々を払いのけ、タタリの神々の関らぬ「日常性」を確保しようとする。こうして確保された「日常性」こそ、私たちのたしかな生活の基盤となるのである。

ところで、現代ヨーロッパでは、困ったとき、口ごもったとき、「エヘン」というかわりにどういうことばをとなえ、どういう身振りをするのであろうか。

「**Mon Dieu!**」(わが神よ)

http://catholiquedijon.cef.fr/Nouvelles/Pages_annexes/parole.htm

http://utsunomiya.cool.ne.jp/kido_45/spot/spot2_10.htm

3、「うでぐみ」表現

英語では「ボデー・エクスプレッション」ということばがある。また、それを研究する学問分野もひらけつつあるようだ。しかし、まだまだ幼稚なもので、たとえばしょちゅう腕組みしている人物は攻撃的性格だといったあんばいだ。

どういう身振り、しぐさをするか、この「無言の言語」は学問的に未開拓の分野である。しかし、これはことばよりもはるかに深く人間の身体にしみついたなにものかであり、「心」と社会をつなぐ確実な兆候である。

《きまぐれ占い》《恋愛統計学》《しぐさでわかる性格判定》

個人の心理の内奥を、おそらくしぐさはのぞかせるものである。無意識であればあるだけ、それはゆるがせにできないしるしなのである。同時に、しぐさは一つの文化である。社会のさまざまの集団につたわる伝承の文化である。個人は、個人としてのしぐさをもち、さらにその底に集団に共通のしぐさをもつ。人間はことばを交換することでコミュニケーションを成立さ

せ、文化をもつように、無意識のうちに他人の身振り、しぐさをまねることで社会人となり、一文化の構成員となる。

――と、このように考えてくると、私たち日本の文化は、私たち日本人のどのようなしぐさによって表現されているのか。もっと正確にいうと、たがいにしぐさをまねあうことで、私たちはどのような文化をつくってきているのか。そういう疑問がわく。

4、「あいづち」の表現

あいづち【合[相]槌】～を打つ　chime in　((with))；　make agreeable responses；《EXCEED 和英辞典》

あいづち　あひ―　【相鎚・相槌】（1）鍛冶（かじ）で、師匠の打つ鎚に合わせて弟子が鎚を入れること。あいのつち。向かい鎚。（2）相手の話に調子を合わせてする応答。――を打・つ　相手の話に合わせて受け答えの言葉をはさんだり、うなずいたりする。《『大辞林』第二版》

「あいづち」ということばは、二人の共同作業の快味をよく伝えている。正月の餅つき、杵を搗く人よりもむしろ、拍子面白く臼取りする人のほうが、仕事として難しくおもしろいのではなかろうか。受け身の、従の立場の方が、共同の仕事のなかで、より困難でより愉快味のある役割であるようだ。

ヨーロッパでは相手の感情をくんで、好い振舞をすることを「タクト」という。

《参考文献資料》

◇多田道太郎著『しぐさの日本文化』に誘われて―

5、「微笑み」と「笑い」

「ゑみ」と「わらい」の違いを明確に示した柳田国男は、「わらい」には必ず声があり、「ゑみ」には少しもないという。そして、「わらい」の場合、時として相手に不快感を与える。また、やさしい気持ちのこもっていない「わらい」もある。それに反し、「ゑみには如何なる場合もそういことがない。是が明らかなる一つの差別であった」（『女の咲顔』より）。

ラフカディオ・ハーンは、日本人の表情について鋭い観察をのこした人である。彼があるとき、三人の日本婦人と汽車に乗り合わした。彼女らは左の袂で顔を隠し、こくりこくり居眠りしている。それは「まるで流れのゆるい小川に咲いている蓮の花のようだ」（『心』平井呈一訳）という。

自身の寝顔が美しいかどうかは、当人にはわからない、当人にとって乗り合わせた同性であ

る他人の寝顔をもって自身の寝顔を想定するしか術がないからである。それは夢見る天使の如きやさしき寝顔であり、ひょっとすると、不用意な顔を見せるのではというこにもなりかねない。そう自身のありのままの表情をさらけ出すのだから、自身の寝顔がどちらを見せているかが気になってしまうのだ。少なくとも、ひところ昔の女人のたしなみにはなかったことだ。

袂の袖で顔を隠すというのは、時には愁いを時には恥ずかしさを……、つまりあらわな表情を人に見せまいとする「しぐさ」そのものである。この「しぐさ」が日本の伝統的なつつしみの表現であることは言わずもがなであろう。

和服姿の女人がめっきり少なくなった今、――それも「晴れ姿」のみの儀礼化が進んだなかで、着付けもできないお嬢さんたちが、はたして袂の袖で顔を隠す行為をするだろうか？確たることはわからないまでも、ラフカディオ・ハーンは、袂の袖で隠された顔を美しく感じたことは言うまでもない。そして、その姿態を日本人の微笑と結びつけて考えていたのは、なるほど鋭い観察眼にほかならないのだ。

ラフカディオ・ハーンは、さきほどの話しにつづけて、

「わたしの家で長年使っていた下男があったが、この男のことを、わたしはふだんからしごく快活な、後生楽な男とばかり思っていた。物を言いかけると、この男はいつでもけらけら笑っている。《中略》ところが、ある日のこと、この男が自分ひとりでいるときに、わたしはそっとのぞいて見て、まるで男が気のゆるんだ顔をしているのに驚いたことがある。いままでこっちが知っていた顔とはまるで打って変わった顔つきなのだ。心の痛みと腹立ちのこわい皺があらわれて、年が二十も老けて見えた。わたしはエヘンと咳払いをして、自分のいることを知らせてやった。すると、たちまちその顔がやわらいで、まるで若返りの奇跡にあったようにはっと明るくなったのである」（同上）。

人は「この男」のこの笑いをどう解釈するであろうか。面従腹背と攻撃するか。それとも、お世辞笑いの欺瞞と指摘するか。それとも、例によっての不可解な日本人の笑いをうんぬんするか。ラフカディオ・ハーンは違う。彼は言っている。

「これなどは、じつに、ふだん自分を殺しつけている自制の奇跡である」と……。

日本人の笑いは主として自制の笑いであり、自制がさらにきびしい場合には、その笑いすら、袂の袖で隠してしまうこともある。高らかに笑うことが不自然であると人が感じたとき、笑いはこのように抑制的なものとなっていった。さきに触れた柳田國男の云う、一座のなかで笑っている人がいるときに、これに同調する「ほほえみ」が「わらう」人よりも数多くいる。公然たる笑いでなく、「笑っている人に対しての一種の会釈」だったという。「こんなことに笑いこけるのは、はしたないと内心では思っても、自分ばかりつんとしていては、反感を表示したことになる。人が楽しみ又は気になっている場合が、ことにまわりの者のエガオの必要な時だったので、是を雷同附和とは誰もみていないのである」（同上）。

笑いがもし哲学的解釈を必要とするむつかしい現象だとすれば、微笑は社会心理学的――それもきわめて微妙な――解釈を必要とするむつかしい現象だ。

個人差――というようなことは今はさておいて、ラフカディオ・ハーンや柳田国男が提示し

たような微笑、これは日本人固有のものだろうか。ある意味ではそうではないと思う。わたしの出会った数少ない国々の人は、やはり共感の微笑をもらす。フランス語の sourire ということばは、ほとんど正確に日本語の微笑にあたる。

イギリスのかなり格式ばったパーティで、日本の婦人が笑い――それもおそらく微笑をかくすべく口許を手で覆ったところが、それははなはだ非礼として咎められたという話しがあるが、真偽のほどはどうであろうか。しかし、笑いを隠す動作を、もしかりに不作法だと思う人がいたとすれば、かなり人間の表情とその表現について鈍感な人であるまいか。⇒《諺》に「処変われば品変わる」

会釈としての微笑はおそらくどの国の人々にも共通の表情である。とはいうものの、たとえばさきにいったフランス語の sourire ということばには、人を小馬鹿にしたうすら笑いという意味もあり、われわれの「微笑」にはそのような意味は少しもないことには注意しなければならない。つまり、会釈としての微笑は、わが国では社会に広く行き渡った自制としての微笑となっている。これは「文化」として、わが国にははっきり定着しているということだ。

モナリザの微笑

だから、私たちは文化に従って人の微笑の意味を正確に読み取るが、それは文化を異にする他国の人には、かならずしも正しく通じていないということでもある。

柳田国男は、微笑をけっして付和雷同の笑いではないといった。確かに人につられて笑うといったものではないが、しかし、他人との場における同調がほとんど自発的とみえるぐらい、ごく自然なりたちで行われている社会での、これは目立った表情なのである。

私たちは長い間微笑しつづけてきた。とりわけ「目上」の人に対して。それはほとんど第二

の天性である。

会釈としての微笑、これは異国の人に理解される。しかし、自制としての微笑、これは時に人を感動させ、ときに人を惑わせる。しかも、私たちは、自制としての微笑から、さらに内に屈折し、複雑化した「微苦笑」の笑いに移ってきた。

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、微笑に自制心をみたわけだが、「微」というのは「小」に通ずる。「小股の切れあがった」とか「小手をかざす」とかいうときの「小」である。「小手」という手の部分があるのではない。それは手を「ちょっと」かざすという意味なのである。その「ちょっと」とは、抑制の効いた、自制心のあるという意味を匂わせている。そういえば、人を呼ぶとき「ちょっと」と呼びかけるのは、呼びかけというどうしようもない不作法に対する和らげの気持ちからである。最も、今では「ちょっと」ということばもすたれてきたし、「小」は「小生意気」とか「小賢しい」とか、悪い意味のものばかりが残っているような気がする。

抑制よりも攻撃の方に、力点がうつりつつある。これは文化としては一種の後退現象である。

7，その他

「髪をなでる」「脚を組む」「眉毛にふれる」「ため息をつく」「欠伸をする」「目をつぶる」「耳を動かす」「腰に手を当てる」

などなど、まだまだ取り上げたら数え切れまい人しての動作のなかで多様な「しぐさ」をみせているのである。あなたも注意深く観察してみませんか？。

まとめ

「しぐさ【仕種】」という「立ち居振る舞い」というタイトルは、両者ともに人が催す動作行為を表象したことば表現である。このとき、人は身体のどの部位を用いてこの行為を魅せるかである。この一連の聯続した動作行為が立ち居振る舞いとなっていく。この演じ手の身体構造ともいう脚であれ、手であれ、髪であれ、その一つ一つの部位が美しいのに超したことはない。美的センスからすれば、どこまでを美人の領域と見定めるかであろう。たとえば、女は美人であることに超したことはないという。では、男はどうだろうか？「美人」ということば表現をもって仕えるのだろうか……。

日本の伝統芸術である歌舞伎役者は、全員男性である。女役を担当する役者を「女形」と呼称する。文字通り、女人のかたちしてあらゆる女人（＝老婆・ご新造・姫・娘など）を演ずるからである。その立ち居振る舞いは女人の立ち居振る舞い已上に美しい。だがこれを評して「美人」と表現するのだろうか？聊か話しがそれたかのように思うが、この歌舞伎役者に焦点を絞ってこの立ち居振る舞いとそのしぐさを見ておくことは、実は大いなる指標をおいての話しだ

からである。

英国の俳優チャップリンが演じたその多くの世界は、男性社会での紳士像だった。それも「放浪紳士」、その姿態や行動、そのしぐさはまさしく紳士なのに、彼は戸外である街じゅうをスッテキを片手に放浪徘徊する。決して大きな屋敷や庭園に身をおいて人々と宴会を催すような人物ではないからだ。だが、その所作の基本作法は、ハンケチを所持し、料理のナイフ・フォークも実に洗練された捌きを見せて、多くの婦人を談笑させることもできる能力を有していた。

この「しぐさ」は、人間行動学ではない、人間観察学という領域の学問が存在するとすれば、毎日同じように行動する電車に乗ってくる多種多様な乗客（＝老若男女）のしぐさや立ち居振る舞いのパターン分類考察がこの方法であって、これをことばにしてどう表現するかということにもなろう。人は己が氣付かずじまいのうちに、他人にその一部始終の活動行為を観察され続ける生き物なのかも知れない。

※本日の講義を終了します。ありがとう！